

2020. 11. 30

No.221

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送年間1,500円)



「慰安婦報道訴訟」最高裁、市民感覚から遠い決定



11月3日 晩秋の北大構内

新型コロナ感染が11月中旬になってから全国で広がっています。北海道は特に危機的で、一時は感染者数が東京より多い日があり、不安が増しました。政府はまったくの個人任せで、「マスク会食」を呼びかけるだけ。GoTo見直しは連休が始まった日に発表されましたが、テレビで報じたのは観光地にあふれた人々の姿でした。具体的な対策はないのですか？

医療体制がひっ迫していると各地から報告がありました。経済回復と感染防止の両立はできません。まずは国民の命を守っていただきたいです。

植村裁判を支援してきました。勝利を期待していましたが、敗訴の報が届きました。

元朝日記者の敗訴確定*慰安婦報道訴訟 上告棄却2020/11/20 北海道新聞朝刊全道版(第二社会面)

朝日新聞元記者の植村隆氏(62)が、従軍慰安婦について書いた記事を雑誌に「捏造(ねつぞう)」と掲載され名誉を傷つけられたとして、ジャーナリスト桜井よしこ氏と出版社3社に計1650万円の損害賠償などを求めた訴訟で、最高裁第2小法廷(菅野博之裁判長)は植村氏の上告を退ける決定をした。18日付。桜井氏の法的責任を否定した一、二審判決が確定した。

裁判官4人全員一致の結論。

2月6日の札幌高裁判決によると、桜井氏は2014年、週刊新潮(新潮社)など3誌で、植村氏が1991年に書いた記事を「捏造」などと批判した。

植村氏側は「植村氏本人への取材が必要なのに怠った」などと主張したが、判決は名誉毀損(きそん)の成立は認めた上で「推論の基礎となる資料が十分にあり、本人への直接取材が不可欠だったとは言えない」と述べ、請求を退けた。

植村氏は19日、オンラインで会見し「法廷では桜井氏自身が事実誤認を認めた。私が捏造記者でないことは明らかになった」と述べた。

植村裁判を支える市民の会が発足したのは2016年の4月です。以来、この問題を多くの人に知ってもらおうと道内だけでなく九州や沖縄などで講演会を行いました。その様子は銀河通信でも紹介しました。その時の私の決意は、「植村さんの裁判が勝利するまでは『銀河通信』を続けよう」でした。

植村裁判を支える市民の会のブログ <http://saerukai.blogspot.com/> では植村隆さんの上告(札幌訴訟)を最高裁が棄却したことについてツイッターで抗議する二人の声を紹介しています。弁護士の神原元さん(東京訴訟弁護団事務局長)は「#慰安婦巡り元朝日記者植村隆さんを敗訴させた最高裁に抗議します」のハッシュタグをつけて賛同を呼びかけ「植村バッシングを支持し、権力の犬になり下がった最低の裁判所」と最高裁を激しく批判し「植村さんは捏造記者ではない、という認識はもはや社会の常識だ。植村さんは負けてはいない」とツイート。ジャーナリストの安田浩一さんは「『植村裁判』を長きにわたって傍聴してきた。一、二審を通して裁判所は植村隆氏が『捏造報道』をおこなったことなど認めていない。法廷は桜井よし子氏のいい加減な(取材もろくにしていない)記述こそがあぶり出された。最高裁の決定に憤りを感じる。植村氏の家族にも向けられた脅迫は、絶対に忘れない」とツイートしています。

市民の会の声明「歴史を裏切る判決許さず」は8ページに掲載しました。

紅葉の道南・北斗市の当別丸山と福島旧山道（殿様街道）を歩く

10月27日 当別丸山



車窓から見る秀峰駒ヶ岳

道南の山歩きを楽しもうと日本山岳会の北海道支部の山行が10月27日～28日にあり参加しました。札幌駅に集合し、23人が貸し切りバスで7時半に出

発。全員マスクを着用。車窓からの景色を見ながら道央道を一路北斗市へ向かい、正午前に当別丸山の登山口があるトラピスト修道院に到着。



紅葉のツタに囲まれたルルドの洞くつの聖母マリア像

ここで北見のMさん、日高町のTさんが合流。函館からは海川敏雄さんと片岡次男さんに講師として同行していただきました。数年ぶりにお目にかかり懐かしかったです。ベンチで昼食後13:20出発。鬱蒼とした杉林を抜けて、階段ルートを進ると、壁一面に紅葉したツタに囲まれたルルドの洞くつに着きました。この洞くつはピレネー山脈にあるフランスの聖地で、カトリックの世界的巡礼地ルルドを模したもので、聖母マリア像が安置されています。紅葉に映えて美しく、そと旅の無事を祈りました。



厳しい登りが続く広葉樹林帯

ここからは短いけれど厳しい樹林帯の中を歩く。傾斜がゆるくなり頂上。一等三角点の「当別丸山」と、道内に8ヶ所設置されたと言われている天測点があります。



当別丸山頂上で

帰路は展望台へ。ベンチが一つあるだけですが、津軽海峡やトラピスト修道院全景などの眺望を楽しみました。道内では渡島半島だけに分布する低木のオオバクロモジが目立ち、小枝のかぐわしい香りを楽しみました。高級つま楊枝の材料になることを初めて知りました。駐車場16:30登り1時間45分、下り1時間15分。



展望台から見るトラピスト修道院全景



オオバクロモジ



知内温泉ユートピア和楽園

下山後はバスで知内町に移動し、開湯800年、道内最古という知内温泉ユートピア和楽園に宿泊。美味しい料理をいただき、久しぶりの山仲間と親交を深めました。

10月28日 殿様街道

翌日も快晴。知内温泉からバスで福島町千軒の福島山道入口（殿様街道）に着いたつもりが下山口だったため、少し時間のロスがありました。先に到着していたこの日の講師の清水和男さんと、合流し、9:15 出発。

起点に、国鉄松前線の跡地なども利用して周回できる全長約7^{km}の探勝コースが整備されています。かつて27里（約105km）あった松前から箱館（函館）に至る街道の一部だそうです。

「殿様街道」は江戸時代にお城があった松前と箱館を結ぶ旧街道の一部で福島町千軒地区と三



茶屋峠

岳地区に残っている山岳古道です。清水さんによればもともとは「福島山道」の旧知内峠、旧福島峠などと呼ばれていたとのことですが、江戸時代に松前の殿様も通った道だということで近年「殿様街道」の俗

称で呼ばれるようになりました。千軒の住川地区を起点に国鉄松前線の跡地なども利用して周回できる全長約7^{km}の探勝コースが整備されています。

土方歳三など幕軍の勇士がこの街道を松前城目指し駆け抜けた歴史ある道です。緩い坂道をゆっくり進み、峠で大休憩。下りのブナ林帯を紅葉を楽しみながら歩くと茶屋峠に着きました。崩落の多い下り坂を慎重に歩を進め、福島川河畔林内を渡渉もしながら辿ると鉄橋の沢に入りました。涸川原には天然ナメコがいっぱい。みな歓喜してナメコ取りに夢中。私も夕飯の味噌汁用に少しいただきました。清水さんに頂いた資料によればこの辺りは江戸時代の「蝦夷道中記」(吉田有利著)に「四十八瀬」と記された所です。



天然ナメコ取りに夢中の私たち



樹齢200年のブナの大木



福島川河畔林内を行く



鉄橋を渡るとトンネルに



厳しい登りが続く

さらに進むと上流線路跡に出ました。鉄橋2か所を渡りトンネル口に着きました。

ここからの急坂ジグザグ路からは高橋健さんにリーダーを交替。峠山の嶺線(分水嶺尾根道)までは、予想以上の距離です。ジグを切りながら列の乱れを整えつつ大休憩し昼食としました。午後の登りは紅葉、黄葉の明るい林を登ります。尾根道は右がトドマツ林、左がブナ林の雑木林で、右の樹間から大千軒岳が見えました。

さらに進むと、「砲台跡」の看板のある場所に到着。箱館戦争の際、この街道を通過して松前を目指した榎本軍の土方歳三らを迎え撃つために松前藩が「明治元年10月末頃 300 匁砲 2門設置」と記されています。砲台跡からは30分足らずで千軒側の入山地点に戻りました。到着14:15



砲台跡

津軽海峡越しに秀麗な岩木山を望む

江戸時代の



左から山歩集団「青い山脈」代表の清水和男さん、私、日高山脈ファンクラブ(今は解散)事務局長の高橋健さん、道南の山や植生に詳しい片岡次雄さん。清水さん、片岡さんは80代後半ながら健脚。私も見習いたいです。山行は久しぶりででした。

歴史に触れ楽しかったです。樹齢200年のブナの大木も印象に残りました。この企画が11月だったら、コロナ感染拡大で実現しなかったと思います。今年は個人で登る山ばかりでしたが、こんなに心が弾んだ

企画からバスや宿の手配まで準備してくださった藤木俊三支部長と、現地でお世話になった海川さん、片岡さん、清水さんにも感謝します。

「証言 沖縄スパイ戦史」と「ヤジと民主主義」がJCJ賞に



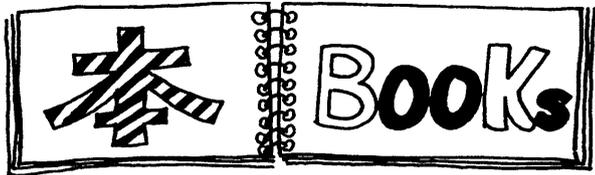
2019年10月上映会「沖縄スパイ戦史」会場で監督：三上智恵さんと

215号で映画「沖縄スパイ戦史」を、217号で著書「証言 沖縄スパイ戦史」いずれも三上智恵さんを紹介しました。今回は著書がJCJ賞を受賞。北海道放送の「ヤジと民主主義」も同賞を受賞しました。その思いをYouTubeで聴きました。要旨です。

三上智恵さん「皆さんは沖縄戦のことを知らなすぎ

ませんか、軍隊が自分たちを守ってくれると、どうして言えるんですか。沖縄戦の悲鳴、うめき声はまだ収まってない沖縄では、この国がまた戦争に向かって加速度的に進んでいく恐怖を感じます。この島をもう一度戦場にしてはいけない。この本が、次の戦争を止める最高のワクチンとして日本国民全員に効くよう活動を頑張りたい」

北海道放送ディレクターの長沢祐さん『安倍辞めろ』の声をあげた男性はHBCが取材していましたが『増税反対』を訴えた女子大生や『年金改悪反対』のプラカードを掲げた女性が警官に排除されるシーンは、市民撮影の映像協力を得ながら番組を構成しました。私たちは市民排除の理由を問い続けましたが、道警は7カ月たっても、理由を明らかにせず、権力取材の難しさを痛感しました。これからもいろんな問題取材し、民主主義が形骸化することが無いように取り組んでいきたいと考えています」



らの語り部が現代社会に語り残す



一枚の切符
あるハンセン病者のいのちの綴り方

崔南龍（チェナムヨン）著
みすず書房 2,860円

崔南龍さんは1931年に神戸に生まれた在日2世。10歳でハンセン病になり

瀬戸内海の島にある国立療養所、邑久（おく）光明園に強制収容され亡くなるまでの76年間の魂と生活の記録です。

国民年金からの排除、隔離法廷など、病と民族による二重の差別との闘いや、療養所の歴史的な実態と生活を詳細に綴ります。晩年は孫和代さんが崔さんから聴きとって構成した文章から編まれています。少年時代の記憶が鮮明で描写力に驚きましたが、孫さんの言葉を引き出す力が素晴らしいです。

崔さんの人生を追った輿石正監督の「岸辺の杵（くい）」上映会をさっぽろ自由学校「遊」が企画。予備知識を得たいと読んだ著書です。ハンセン病回復者と北海道をむすぶ会で、ささやかな活動をしてきて、松丘保養園や多摩全生園、邑久光明園にもハンセン病市民学会で行ったばかりでした。同じ療養所にながらなおも人は人を差別するものかと、悲しくなりました。

日本語の読み書きが十分ではないこともあって、墮胎児の処理や火葬作業を含むきつい仕事に就かされます。「指紋押捺」もハンセン病者には要求されなかったことも知りました。療養所では『いのち』と『生きる』ということは、別な問題である」と崔さんは言います。「生きる」から切り離された「いのち」の一部は「胎児標本」とされ、長く放置されていましたが2008年に焼却されました。「これも数に入れてください」との崔さんの言葉に胸を突かれました。崔さんは殺された胎児たちの代弁者になろうとしたのです。排除された者たちの声にならない叫びをかき消し、忘れ去ろうとする暴力に抗い、書き綴った命の尊厳に心打たれました。15歳の時、郷里に帰る切符をくれた寮母さんの心遣いが本書のタイトルになっています。

上映会は11月初旬に開かれ、80人に鑑賞してもらうことができました。輿石監督の深みのある語り崔さんの人間性を浮き彫りにしました。

上高地牧場から徳澤園へ

世紀を超えて
徳澤園135年史

菊地俊朗・上條敏昭共著
本のお求めは徳澤園HPから



北アルプスの山宿「徳澤園」が今年135周年を迎えその記念に出版されたのが本書です。上高地牧場から始まった徳澤園の世紀を超える長大な歴史の物語です。

第一部は上高地牧場50年。山岳ジャーナリストの菊地俊朗さんが、各資料に断片的な記録しかなかった上高地の牧場についても丹念に調査しています。前身の牧場は、上條敏昭さんの曾祖父、百次良が1885（明治18）年に開業しました。畜産振興を掲げる県が、自治体に種馬を好条件で貸し出したのがきっかけでした。百次良は旧南安曇郡安曇村のリーダー的立場で、まとまった平地がある上高地に目を付け、ピーク時には400頭を超える乳牛、食用の牛馬を飼育したという。その後、登山者が増えて牧場を閉鎖して、山小屋に変わります。冬期間の山岳基地として遭難者の搜索拠点だったことが記されています。

第二部、徳澤園の85年の項は4代目の上條敏昭さんが書きました。小屋番の日誌や、井上靖さんが小説「氷壁」で徳澤園を舞台として取り上げたエピソードなどを執筆。現在の徳澤園は「氷壁の宿徳澤園」という肩書付看板に掛け替えられました。昨年亡くなった、女優八千草薫さんが何回も訪れたことも紹介しています。八千草さんの山好きはよく知られていますね。遺作となった「ゆずり葉の頃」での、若い時と変わらない清楚さと凛としたたたずまいが印象に残っています。女性初のエベレストに登頂した田部井淳子さんについては、夫の田部井政伸さんがエッセーに徳澤園が気に入って「1年に1回は美味しい食事を食べに行く」ことを決めていたそうです。私は国際山岳年の2002年に大雪山系で開かれたセレモニーでお目にかかり気さくに話しかけられたのがとても印象に残っています。今、世界の「tabei」への再評価が広がっているという記事を最近読みました。登山や、環境保護運動、被災地支援と2016年に77歳で亡くなるまで、自分らしく生ききりました。また、早稲田大学山岳部の合宿所として親しまれてきて、現在も続いています。近くには日大医学部徳澤診療所もあり、今も診療しているというのも素晴らしい。山や自然を愛する人々が、徳澤園を支えて来たことが伝わってきます。そして先代から現在に至るまで、大地に根を降ろして、共に汗を流した妻たちの活躍も目に見えるようでした。

1963年には「上高地を美しくする会」を発足させ自然保護と環境美化の活動も続け、50年を超えています。60年にも及ぶ徳澤冬季小屋の話なども興味深い。上高地の歴史の一端を知る貴重な一冊です。



現場の記録を残したい

孤塁 双葉郡消防士たちの3・11

吉田千亜著 岩波書店 1,980円

3・11の福島原発事故の時、ほとんど報道されなかった双葉郡消防本部の

活動を詳細に記したドキュメンタリーです。

孤立無縁の中で救急活動が続け、初めて聞く15条通報(原発の緊急事態)に命がけで原発構内での給水活動を行った120人の消防団員。その66人から、吉田千亜さんは話を聞きました。

吉田さんは自分の感情を差し挟まず、一人ひとりの体験した事実を書き留めました。ある消防士は「雪が降る中、両サイドに職員が並び、敬礼する間を、車両が一台ずつ出ていく。出発のこの景色は決して忘れないだろう、きっと特攻隊はこうだったのだろう」と語ります。それぞれに家族がいても、二度と会えないかも知れないと覚悟したと、多くの人が語っています。ある団員はいました。「自分たちの活動は国や県の記録に残っているのだろうか」と。「無事な保証は何もない」「これでは、特攻隊と同じではないか」悲壮な言葉が何度も出てきて消防士という仕事の過酷さに胸が締めつけられ、怒りが沸きました。消防士は家族と連絡を取ることできず、死と背中合わせで原発事故に対処しなければなりません。消防士たちの聞いた音、匂い、感じた恐怖や不安。濃密な細部が次々に積み重ねられる描写が圧巻。吉田さんは「地域を守る人がどれだけ守られていないのか」を知ってほしいと述べてます。

原発事故からもうすぐ10年。福島から北海道にもたくさんの方が避難してきました。「原発から必死に逃げてきた。できるならみんなを連れて来たかった」と語ったSさんの言葉が忘れられません。Sさん一家は今札幌に根を降ろしていますが、家族が一緒に暮らせずバラバラになった人もいました。この本を読んで、当時の状況を思い出さずにはられません。寿都町と神恵内村では核のゴミが持ち込まれようとしています。許してはならないと思います。事故について語る人も少なくなり風化が進んでいると感じます。

是非、たくさんの方に読んでいただきたい。本書は今年度の本田靖春ノンフィクション賞とJCJ賞を受賞しました。



弱者の心に寄り添って

苦海・浄土・日本

石牟礼道子 もだえ神の精神

田中優子著 集英社新書 968円

私にとって「苦海浄土 わが水俣病」は公害問題から自然保護運動に深く関わるようになったとても大事な本です。

石牟礼道子は水俣病と出会うことで幼い頃から培われてきた「もだえ神」、つまり困っている人のために何を措(お)いても「悶(もだ)えてなりとも加勢せんば」と寄り添ってやる精神が自覚された。だから田中優子さんは『苦海浄土』を「人々の中に道子が成り代わって内部に入り込み、本人さえも言葉にできない言葉を聞き

取り、その声を受難・受苦の物語に写し取った」といいます。新型コロナ・パンデミックは道子が生きていたら「近代の病理」ととらえるだろうとも書きます。

大学の授業で、『苦海浄土』に出逢い、それまでの文学への考え方が一変する衝撃的な洗礼を受けたという著者。以来四十数年間、石牟礼を自身の最も大切な存在として思い続けてきたと記します。心に響いたことのひとつが水俣の漁師の世界でした。著者は豊かな世界と生きてきたのに、近代社会と前近代社会では、豊かさが逆転してしまったということに気づかされたと言います。もう一つは胎児性水俣病の子どもたちが、著者とほぼ同世代だったこと。当事者と自覚し、そこから逃げずにあらゆる社会問題の渦中に、道子と同じ「もだえ神」として身を置こうとしてきた人だったことです。

著者は今の新型コロナが蔓延する事態に「自然との共存ではなく介入と破壊が続けば、その波はこれからも何度も訪れ、もっと多くの人々が亡くなる。水俣病がそうであったように事態は隠され、甘く見られ、やがて病者や濃厚接触者や医療従事者は差別されると書き、石牟礼道子には永遠のアニメとなって、衰弱しつつあるこの世の行く末を、その透徹するまなざしで見つめ続けてほしい」と願う。

私も差別は許せないといいながら、いつの間にか、強者の側にたっていたのではなかったかと気づきがありました。水俣病から学ぶべきことが、原発事故やコロナでも同じことを繰り返しているように思えてなりません。「もだえ神」とは、何もできなくても、困ってる人のところに行き、一緒に苦しむこと。そういう人が増えたら、息苦しい社会も変わるのではないのでしょうか？

お勧めの本を紹介してください

毎号、4~5冊の本を紹介していますが、内容と感想をまとめるのが大変です。次号からは読者のお勧め本を、毎回1~2冊紹介できたらと思います。字数は800~1000字以内でメール添付でも、手書きでもかまいません。私も2~3冊なら書けそうです。よろしくお願いします。

購読料と寄付をありがとうございます
(敬称略) 10月5日~11月9日

高橋儁(切手も含む) 山野井孝有 浅川身奈栄 林秀起 イデアユミ 齊木登茂子 渡辺妙子 合計26,500円は印刷と送料に使わせていただきます。高澤光雄さんからは著書「エッセー集 山旅句」を頂きました。合わせてありがとうございます。

郵便振替「銀河通信」02740-7-56535

2021年からは年間2,000円に変更します。WEBに切り替える方はお知らせください。220号でお名前の間違いがありました。

岩井義昭さん→(正)岩井善昭さん
申し訳ありません。

全国映連（映画鑑賞団体全国連絡会議） 2020年第35回評論賞で優秀賞に選ばれました

「パブリック 図書館の奇跡」が思いがけなく全国映連評論賞で優秀賞に選ばれました。（220号をご覧ください）

「執筆者の体験（本人自身・知人からの伝聞）を織り交ぜながら、図書館の存在意義や民主主義と市民についても言及した、『公共』とは何かを考えさせる作品だった」と評していただきました。嬉しいです。たくさんの方からお祝いのメッセージを頂きましたので紹介します。

■映画サークル会報の樋口さんの映画評、鋭さのなかに必ず優しさを感じ大好きです。今回の受賞、さすがですね。おめでとうございます。これからは樋口さんの映画評を楽しみにしています。（黒木沙会子さん）

■忙しい中の受賞、おめでとうございます。受賞に十分、価値ある内容だと思います。樋口さんは超忙しい中であちこち出かけて、読んで観ての感想にいつも感心しています。（増子捷二さん）

■長年の映画評の蓄積と樋口さんらしい感性が“全国区”で認められたという感じですね。（塩川哲男さん）

■優秀賞おめでとうございます。これに限らず銀河通信の全ての記事は、物事や人を深く鋭く観察されていることに驚きと感銘を受けています。（鈴木澄江さん）

■受賞がめでたいというより、賞に意味と格を与えたみな子さんに感謝です。あの作品は、実に良く出来ており、本当の佳作だと思う。素晴らしい感想コメントに感謝し、そのコメントに賞を送って下さった映画人に感謝です。今回の賞授与は、通信の存在、年月の重み、全

てに対するリスペクトだと思います（堀元進さん）

■通信で拝読していた映画評はわかりやすく感心していました。応募された皆さんは一流の鑑識眼をお持ちでしょうから、その中から選ばれたということは、その内容評価が極めて高かったということ自ずから示しています、おめでとうございます。（伊藤誠一さん）

■私は賞の権威が嫌いです。しかしそういう意味で貴方がお貰いになった賞は純粋に御自分を褒めて良いものだと思います。本当におめでとうございます。良かったですね。これからは腕を磨いて楽しい映画評を届けて下さい。（獅子吼老さん）

■みな子さんの論評受賞は、まさにご自身の生き方、活動、実践があったからこそその結果であると思います。私も自分の目でこの映画を見たくまりました。おめでとうございます。（芳賀淳子さん）

■みな子さん、受賞おめでとうございます。地域や民族を超えて同じ人間として差別のない地域、社会を願い、市民一人一人の小さな命、声を大切に作る取り組みを長年され、それを映画や本の紹介を通じて発行し続けてきたからこそその受賞、素晴らしいと思います。（澤耕司さん）

■視点の的確さ、文章のみごとさに敬服していました。情理そなえた達意の評論。ちゃんと見抜く人がいるのですね。（宮下嶺生さん）

Cinema Graffiti 〈私の映画評〉 シネマグラフィティ

イラク戦争の嘘を告発

『オフィシャル・シークレット』

樋口 みな子

札幌映画サークル会報
シネアスト
2020年12月
号掲載



で尋問が及ぶ状況に耐えきれず、彼女は自ら「リークしたのは自分だ」と名乗り出て、公務秘密法違反で逮捕

新聞の「ひと」欄に紹介されたキャサリン・ガンさんの記事に引付けられました。そこには当時から17年たった笑顔の彼女がいました。

2003年のイラク戦争。米英両国は「大量破壊兵器保有」を理由に国連決議なしで強行しました。その開戦2ヵ月前、英国の情報機関に勤めていたキャサリンは、米情報機関からの極秘メールを見て衝撃を受けます。国連の安全保障理事会にイラク攻撃を認めさせるため、安保理事国の盗聴を求めるメールをひそかにリークした実話をギャヴィン・フッド監督が映画化しました。

本作は「国家の圧力に屈せず、真実を社会に知らせるといふ女性の勇気ある告発」というだけの物語にはなっていません。オブザーバー紙に大きく掲載されると恐怖におののきます。巨大権力を敵に回す内部告発をしたことで、プレッシャーに苛まれる様が克明に描かれ、胸が痛くなりました。昨年日本アカデミー賞受賞の『新聞記者』での場面と重なりました。

リークした犯人探しが始まり、自分の仕事仲間にも

されます。その後の彼女の柔らかく美しい表情が印象的でした。クルド系トルコ人の夫は強制的に本国に移送されかけたりもします。「脅しと嘘に基づいた戦争なんて許せない」彼女の言葉にこの映画に込められたメッセージがつまっています。同僚たちの「あなたは正しいことをした」とそっと応援する姿や「彼女を守り抜く」と共闘する記者たち。そして人権派弁護士らの支えもあり、ひとりの平和を願う女性が社会的地位を失うというリスクを負いながら、周りの支援で正義を貫く姿を描いていることに共感。次第にたくましくなっていくプロセスに思わず心が踊りました。

刑事の尋問に彼女は「政府は変わる。私は国民に仕えている。政府が国民を守れるように、私は情報を集める。政府が国民に嘘をつくためではない」と答えます。告発を報じた記者は初公判に臨む彼女に「政府も諜報機関も報道も国民を裏切った。うちの新聞社も戦争を支持していた。君の行

動は重要なことだった」と伝えるのです。嘘と欺瞞に満ちた諜報の世界でも守るべき一線はあるのです。彼女の告発を果敢に報じたメディアと国の嘘を描き切った映画が健在であることに「民主主義は生きている」と英国に羨ましさを感じました。我が国のメディアはここまで権力監視の報道をしているのでしょうか？
広島で暮らした体験があるキャサリンさんはインタビューに「戦争を止めようと告発に踏み切ったのは、被爆地で知った原爆の真実が背中を押した」「核の恐怖を忘れてはいけない」と語っています。

劇場型犯罪の真実を迫及した人間ドラマ

罪の声

土井裕泰監督、野木亜紀子脚本

35年前、食品会社を標的に、社長誘拐や身代金要求、毒物混入などで世の中を震撼させた未解決事件。劇場型犯罪と呼ばれました。



新聞記者の阿久津英士(小栗旬)が事件を振り返る取材を始めます。テラーを営む曾根俊也(星野源)は、自宅で古いカセットテープを見つけ聞くと、身代金の要求に使われた子どもの頃の自分の声だと気づくのです。誰に利用されたのか？最初は反発しあった二人ですが、互いの真意を知って、真相解明のために協力し合います。曾根は罪悪感に苦しみますが、自分以外の二人の子どもの声も犯行に利用されたことを知り、彼らがどんな人生を送っているのか、関係者を訪ね歩くのです。多くの人物が35年前を語ります。そこには様々な人生がありました。

阿久津が上司に「この事件をエンタメとして消費することになりませんか」と問うシーンがありました。マスコミだけではなく、SNSで誰もが、事件の当事者をバッシングできる時代になり、どれだけ傷ついている人が多いか考えさせられました。小栗旬と星野源のかけあいが素晴らしかったです。

阿久津はイギリス・ヨークの古本屋を営む老いた曾根の叔父、達雄(宇崎竜童)と対峙します。達雄はギン萬事件を「俺たちの闘争だった。警察、社会、日本にこの国が如何に空想かを見せつけたかった」と言います。阿久津は「あなたは化石。1984年のままだ。声を使った子どもたちの運命を変えた。子どもたちの未来を殺した！これは正義でない」と迫及するシーンが忘れがたい。正義とは、罪とは何かを浮かびあがらせませす。事件の真実を知り、声を使われた生島きょうだいで、生き残った聡一郎や曾根家族、阿久津は希望をみいだすのです。

塩田武士の長編小説を野木亜紀子が脚本、土井裕泰監督で重層的な人間ドラマになり、心に深く刻まれました。原作も是非読みたい。

老いの孤独と希望をユーモアで描いた

おらおらでひとりいぐも

沖田修一監督

原作は若竹千佐子さんの同名小説で独居老人の日常と自立を描き、2018年に芥川賞を受賞。当時、若竹さんは63歳。207号(2018年5月)に本の紹介を書く予定でしたが紙面の都合で掲載できませんで

した。沖田修一監督が映画化。早速観ました。



主人公は75歳の桃子さん(田中裕子)。娘が結婚をし、夫(東出昌大)に先立たれてからは独り暮らし。どこからともなく呪文のようなつぶやきが聞こえてき

ます。「おらだば、おめだ。おめだば、おらだ」。この主は誰？「もしかして認知症？」。著書では「あいやあ、おらの頭このごろ、なんぼがおがしくなってきたんでねべが」いきなりこの一文で始まります。これは桃子さんの脳内の声です。

いつものように茶の間でお茶をすすっていると、どこからともなく「心の声」(濱田岳、青木崇高、宮藤官九郎)が現れ、桃子さんの郷里の東北弁で語り始めます。題名は東北弁で「私は私らしく、一人で生きていく」という意味です。

若い頃(蒼井優)は自由で自立した女性を目指して、岩手から上京した桃子さん。住み込みで働き、夫になる人と出会い、結婚、出産、子育てが終えると夫との死別が待っていました。

「心の声」の桃子さん3人の登場が絶妙です。小さな茶の間がいきなり広間に変わり、田中裕子が、一人で生きる孤独を熱唱するのに、笑いながら「私もいつかこんな日が来る」と桃子さんの心情がひしと伝わってきて涙ぐみました。図書館で借りた凶鑑を読みあさるうち、46億年の歴史に関するノートを作ります。すると、桃子さんの「心の声」が、ジャズセッションに乗せて内から外に湧きあがってくるのです。桃子さんの孤独な生活は、現在と過去を行き来し、いつのまにか賑やかな毎日が変わっていきます。

驚きはもっとありました。桃子さんがスケッチしたマンモスがスケッチブックから飛び出し、現在と過去が行き来します。死んだ祖母が現れ、桃子さんは愛おしむように手のしわをつまみます。また夫の墓参りには、腰をかがめて湿布を貼る姿がユーモラス。でもリュックを背負い、登山スタイルで歩く姿は澁刺としていました。緑深い林で、出会ったのは若き日の自分でした。全編を貫くのは、自分らしく生きていく桃子さん。その姿を体現した田中裕子が圧巻。沖田監督による丁寧に積み上げられたリアリティとユーモアが桃子さんの佇まいと見事に掛け合わされた作品です。



関東軍の機密を知って

スパイの妻

黒沢清監督

1940年の満州。恐ろしい国家機密を偶然知った優作(高橋一生)は、正義のためにその顛末を世に知らしめようとします。夫が反逆者と疑われる中で妻の聡子(蒼井優)はスパイの妻と罵られようとも愛する夫を信じて、とも

に生きることを誓います。そんな2人の運命を太平洋戦争間近の東アジアという時代の大きな荒波が飲み込んでいきます。濱口竜介と野原位が黒沢清監督とともに脚本を担当。緊迫のサスペンスです。ベネチア国際映画祭コンペティション部門で銀獅子賞を受賞。

物語では、主人公、聡子がフィルムに映写されたものを観ることによって、またはフィルムで撮影した映画に出演することによって、どんどん違う人間に変わっていく契機として使われています。優作は「ぼくはコスモポリタンだ。ぼくが忠誠を誓うのは国家ではない。万国共通の正義だ」と聡子に語ります。彼のあの時代に押し寄せてくるナショナリズムに対する毅然とした抵抗には国際社会で生きていく人間としての良心を感じました。軍事費に多額のお金を投入している日本に危うさを感じる時勢に、侵略戦争の真実に迫った映画が出てきたことに勇気づけられました。

二人で、アメリカに亡命しようと聡子はいいい、「あなたがスパイなら、私はスパイの妻になります」とさえいのです。上海経由でアメリカをめざす夫と別れて、貨物船に乗り込む彼女は、何者かの密告によって憲兵隊に捕まるのです。その後の収容生活を経てアメリカ軍の空爆によって解放されます。蒼井優の存在感がお見事！

日本の戦争責任を問い、国際映画祭で評価された意義は大きいと思います。

女性の生きづらさを描いた

82年生まれ、キム・ジヨン

キム・ドヨン監督

出産を機に仕事を止め、育児と家事に追われるジョン(ジョン・ユミ)。日常に潜む不条理な差別に抑圧され憑依という形で心情を吐



露します。ジョンの母、姉、元上司など世代や立場が違う女性たちも重層的に描き、過去の回想を織り交ぜて女性の生きづらさを描きます。同名の原作(チョ・ナムジュ著)を自身も2児の母であるキム・ドヨン監督が映画化。

「君のために僕も育休をとるよ」「僕が手伝うよ」という夫に「どうして、他人に施しをするみたいな言い方をするの」とジョンは怒ります。日本も育児では同様だと思います。ジョンは、娘とカフェに出かけ、コーヒーカップを落として「ママ虫」と蔑まれもします。夫の実家にいくと家事をするのが当たり前。食事の準備をさせられます。共働きしていても、育児の負担は女性が圧倒的に大きいです。私の職場は男女平等で働きやすかったと思いますが、仕事を終えてから子どもを連れて会議にでることもありました。家事を夫婦で当たり前のようになっている方には羨ましさを感じました。

ジョンが自分の病気を認め、焦らずに社会復帰の道を見出そうとします。夫も父も弟も、今までの差別意識に気が付き変わろうとします。たくさんの女性たちが、自分たちの声を上げて、社会を変えて行けるのだと希望が見えたのが嬉しい。

「植村裁判を支える市民の会」声明

最高裁が植村裁判札幌訴訟の上告を棄却したことについて、植村裁判を支える市民の会と札幌訴訟弁護団は11月26日、それぞれ声明を発表しました。紙面の都合で市民の会の声明を掲載します。弁護団声明は<http://sasaerukai.blogspot.com/> からご覧ください。

歴史を裏切る判決許さず

「国賊」「売国奴」。過去を直視する言論・報道が暴力をも示唆する卑劣なバッシングにさらされる。そのような社会であってはならない。植村裁判支援に結集した市民が共有した思いである。植村隆氏の朝日新聞記事を根拠なく「捏造」と断じ、バッシングを呼び起こした櫻井よしこ氏らに名誉毀損の法的責任を求めた札幌訴訟は18日、最高裁の上告棄却によって一区切りがついた。結果は「敗訴」でも、私たち市民の思いはいささかも揺らいでいない。

「慰安婦」として旧日本軍によって屈辱的な戦時性暴力にさらされた朝鮮人女性、金学順さん(キム・ハクスン、故人)の無念を伝える記事であった。櫻井氏らの言説は、卑劣な集団的セカンドレイブと言うべき社会現象を引き起こしたにもかかわらず「公益性」「真実相当性」を理由に免責した判決は、旧日本軍に慰安婦とされた金さんはじめ多くの女性たちの魂の叫びをもかき消した。

判決は櫻井氏らの主張を「真実」と認定せず、植村氏の社会的評価を低下させる名誉毀損に当たるとした。免責の理屈はどうあれ記事を「捏造」と断じた根拠を櫻井氏らは全く示すことができなかった。櫻井氏がジャーリストを自称するのであれば、「捏造記者」の汚名は櫻井氏こそが引き受けるべきであり勝ち誇ることは許されない。

旧日本軍慰安婦問題をめぐる事実に基づかない櫻井氏の主張を、「真実相当性」のハードルを下げることで、札幌地裁、同高裁、そして最高裁は容認した。このことが「司法のお墨付き」と解され、歴史的事実を無視した誹謗中傷を引き起こさないかと私たちは恐れる。すでにその兆候が見られる。

こうした禍根を将来に残さないためにも、歴史修正主義との闘いを継続する責任を私たち市民は負っている。重い責任ではあるが、あるべき社会を目指す新たな一歩をあすから踏み出す決意を表明したい。

裁判支援を通して多くの出会いが生まれた。2015年2月の提訴以来、札幌での報告集会は17回を数える。多彩な講師を迎え、金学順さんの生前の肉声にも触れた。戦時性暴力の加害責任と私たちの社会はどのように向き合っていくべきか、学びを深めたことは闘いが獲得した成果である。植村氏は国内外を講演行脚して支援の輪を広げ、カンパは世界中から寄せられた。この6年近くに及ぶご支援に心から感謝しつつ、残る東京訴訟の最高裁決定を注視したい。

2020年11月26日 植村裁判を支える市民の会